

助っ人 新 旧



古本勝負

古本好きの新人、大塚君が助っ人に加わって早くも一ヶ月半。しかし彼はただの古本学生ではなかったのである。

ほぼ毎週の古書展通いを自らに課す事により磨きぬかれた古本眼のみならず、ひとたび話がSFあるいはミステリ本の話題になるや披露される、その作家の既刊・翻訳本の有無、さらにはそれが今でも手に入るか否か、さらには再版や復刻版のあるなしにまで及ぶ情報量で周囲を圧倒するのであった。

その古本者に対し「古本は好きだけど、それはただただ安く買えるからだもんね」というスタンスをとる鈴木・関口の素人古本コンビはこう疑問を抱かざるを得なかった。「やっぱ、あれぐらい本に詳しくな

いと掘出し物は見つからないものなのか？」

というわけで、古本者大塚の鑑定眼に挑戦すべく、ゴールデンウィークの神保町に鈴木、関口、大塚および小野、榎山を加えた五人が集結したのであった。勝負内容はシンプルに「誰が最もお買い得な古本を見つけれられるか」。会場は東京古書会館地下ホールで開催されたぐろりや会古書即売展である。

勝負のルールとして、

- ・これこそは掘出し物と思う古本を一人二冊まで選んで購入する。
- ・その本が本当にお買い得だったかを検証する。手段としては、同日中に東京都古書籍商業協同組合インターネット運営委員会が運営するWEBサイト「日本の古本屋」で買った本を検索し比較する。
- ・比較の結果、自分の買った本がネットでの価格より安ければ得点をプラス、高ければマイナスとし、最も得点の高いものが勝ちとなる。

という三点を確認した上で、五人はそれぞれの健闘を誓い合った。

改めて言うまでもなく、今回の古本市に出店しているのはそれぞれが分野は違えど専門的なものまでも取り揃えた店ばかりであるわけだが、全体に価格・内容ともに手頃感のある本が多く感じられ、五人は会場を何周もしてそれぞれ眼力の限りを尽くしたのであった。それでも最終的に小一時間ほどで全員が会計を済ませ、勝負は終了した。

さて、左上に示したのが、それぞれの購入した本と、その本が大体どれくらい値段で手に入るものなのかを勝負のあった5月5日のうちに「日本の古書店」で検索した結果との比較である。なお、「ふくろ小路一番地」は同じ版を見つけることができなかったため勝負からは除外し、見つかったものの価格を参考として掲げてある。

一位は『憎悪の化石』（+2325）『小酒井不木全集』（+1000

氏名	買った本	買値	参考価格（日本の古本屋）
小野	『ドストエフスキーへの旅』 佐々木美代子著（78年）	500円	→ 500円（±0）
大塚	『憎悪の化石（ロマン・ブックス）』 鮎川哲也著（52年） 『小酒井不木全集第三巻』 小酒井不木著（26年）	300円 500円	→ 2625円（+2325） → 1500円（+1000）
鈴木	『ランゲルハンス島航海記』 N・N・フリーゼン著（92年） 『海洋の道』 ハイエルダール著（76年）	1050円 525円	→ 1000円（-50） → 800円（+275）
関口	『構造と力』 浅田彰著（83年） 『乙女のファンタジア』 藤井千秋／藤田ミラノ編著（86年）	100円 1800円	→ 1000円（+900） → 1800円（±0）
榎山	『ふくろ小路一番地』 イーヴ・ガーネット著（78年） 『英米児童文学年表・翻訳年表』 清水真砂子／八木田宣子著（80年）	200円 525円	→ 同じ版での販売情報なし 旧版（函入り）840円 → 2000円（+1475）

0）の二冊をネット上の価格よりもはるかに安く買ってみせた大塚（+3325）。前から探していた本を選んだ榎山が『英米児童文学年表』（+1475）で堂々二位となった。三位は少々の高値をものともせず欲しい本を手に入れ（+900）で関口。四位は、もう一冊のプラスによって救われたものの、唯一マイナスを出した鈴木先輩（+225）。ドストエフスキーの名を見て衝動的に購入を決意した小野（±0）が五位という結果となった。やはりと言うべきか、その場で発作的に本を選び出した感がある古本素人組は熟練の古本者の目に敵うべくもなかったのがある。とはいえ、経験と知識の差がこんなにはつきりと金額に出るとは改めて驚きである。

しかし、敗れた古本素人組も決して損はしなかったし、思ってもみなかった本との遭遇ありで楽しい時間を過ごせたのであった。一位おめでとう大塚君！これからの助っ人に必要なのは知性だ！！